

米国がなぜベネズエラの体制転覆を図るのか 民主主義を装ったファシズム

ジョン・ピルジャー(ジャーナリスト)

安倍首相は4月29日、米上下両院合同会議で日本の歴代首相として初めて演説、米国を「民主主義の師」として持ち上げ、面映ゆいばかりにおもねた。しかし、著者ピルジャーが本通信270号・同271号で糾弾したように霸権国となった米国の民主主義(建国の理念)は惨めなばかりに衰退し、「世界の警察官」を超えて、大量政治殺戮を隠然と行う新たなファシズムを台頭させた。表の権力(政府)が諜報機関を核とする裏の権力を制御できなくなつたためだ。日本の“戦後民主主義”もワシントンの都合により、常に変容を余儀なくされてきた。今や日本「同盟」はグローバルな共同武力行使が可能になるまで進み、アフリカの次は中南米に自衛隊が姿を現すことも十分にあり得る。本稿ではラテンアメリカにおける米国の霸権行使に異議申し立てる急先鋒、ベネズエラの体制転換が米政府や英国をはじめとする同盟国によってどのように企てられているかを対談形式で詳しく論じられている。(編集部)



原題:「共通の敵」に対するベネズエラの闘い

■チャベス政権発足以来の転覆工作

アルバート(以下Aと略):米国がベネズエラ政府を転覆させたいと思う理由は何か?

ピルジャー(以下Pと略):これには単純明快な指針とダイナミクスが働いている。米政府がベネズエラの現政権を排除したがっているのは同政権がラテンアメリカ地域への米国の指示に従わず、ベネズエラが世界最大の石油埋蔵国で資源を一般国民の生活の質向上に使おうとしているからだ。またベネズエラが歴史的にみて貪欲極まる米国によって略奪された南米大陸で社会改革を引き起こす中心的役割を担い続けているためである。

(貧困と不正根絶に向けた国際支援活動団体)オックスファム・インターナショナル(Oxfam International)の報告書は、ニカラグアのサンディニスタ民族解放戦線(FSLN)による(1979年の)革命を「米国に対する脅威の好例」として挙げていた。ウゴ・チャベスが大統領に初めて選ばれて以来、ベネズエラは米国の脅威となっている。言うまでもなく、ベネズエラは弱小国ではないので、米国にとって脅威は大きくなつた。中国はベネズエラを資源豊富で影響力がある国と見ている。

■米の権益を侵せば直ちに破壊活動へ

ラテンアメリカの大勢の人々の将来に著しい変化を生じさせたことが米国ベネズエラへの敵愾心の中核をなしている。米国はこの2世紀間、ラテンアメリカにおける社会進歩に対して密かに敵対を続けた。バラク・オバマであろうとテディ・ルーズベルトであろうと、だれが米大統領府(ホワイトハウス)にいるかは問題ではない。米政府は自国民の利益を優先し、米国の要求と圧力に従順で、これに屈服するのを拒む外国政府と文化を持つ国に対し寛容ではない。

ベネズエラのような資本主義に基づく改革的な社会民主主義国であっても、世界の霸権国(米国)は決して許容しない。米国にとって許し難いのは、ベネズエラが政治的に米国から自立していることだ。許容できるのは完全な恭順と服従だけである。チャベスが礎を築いた今日のベネズエラが生き残っているのは一般のベネズエラ国民が選挙を通して樹立された政権を支持している証拠である。最近ベネズエラを訪問した際、筆者はそれを確信した。

ベネズエラの弱点は政治的な「反政府勢力」——筆者が「東カラカスの暴徒」と呼ぶ連中——が決定的な経済力の保有を認めている有力な利害関係者の代理人であることだ。経済力を持ったこの連中が排斥されることによって初めて、ベネズエラは外国に支援された、大抵は犯罪的な破壊活動による絶え間のない脅威から解放されるのだ。いかなる社会も年から年中このような脅威にさらされ、これに対処すべきではいと考える。

■ソフトパワーとしてメディアを最大限活用

A:米国はこれまでどんな手段を行ってきたのか?(ベネズエラ社会の改革を担う)ボリバル主義者を排除するためどんな出方をすると予想しているか?

P:売国奴やスパイは常に成果を上げている。彼らは(インサイダーとして)取り込んだメディアを偽の情報を流す手段として利用する。だから第1の敵は報道機関である。2002年のチャベス大統領(当時)に対するクーデター首謀者の1人で短期だった暫定政権を担ったベネズエラ海軍の提督が「我々の秘密兵器はメディアだ」と豪語したのを思い出す。

ベネズエラの報道機関、とりわけテレビは、クーデターに積極的に関与し、チャベス政権の支持者らが抗議デモの一群に橋から銃を発射したとの嘘の情報を伝えた。この偽の映像とヘッドラインは世界中を駆け巡った。ニューヨークタイムズがこれに加わり、民主的な反米政権の崩壊を歓迎した。これは毎度おなじみのことである。たちの悪い右翼の暴漢が「抑圧された」非暴力のデモ隊として称賛された昨年、同じような出来事が首都カラカスで起きた。これは疑いの余地なく、使い勝手のよい米中央情報局(CIA)のダミー基金である米国民主主義基金(NED)のような組織に公然と支援された「カラー革命」だったのである。

■ウクライナ政変と根は同じ

それは米政府が昨年ウクライナで成功させたクーデターに不思議なほどよく似ていた。ウクライナの首都キエフで起きたのと同じように、ベネズエラでは「平和裏に行われた抗議デモの参加者」が政府の建物に発砲し、狙撃兵を配置して、西側の政治家やメディアに称賛されたのだ。ほぼ間違いないのは、そ

の目的がニコラス・マドゥーロ大統領率いる政権を動搖させ、その支持基盤を失わせることだったということだ。

ベネズエラ政府を独裁的で無能な統治機構として描くのは、ベネズエラ、米国、英国さらに欧州のジャーナリストや放送メディア関係者の間に長い間はびこっている不誠実さを記事にすることであった。最近の米国のある記事は、爆弾造りでベネズエラを支援しようとして投獄された米国の科学者に関するものだった。記事はベネズエラが「核テロリスト」をかくまっていることを示唆していた。だが実際のところは、この米国に不満を抱く核物理学者はベネズエラとつながりを一切持っていないかった。

■諜報と情報操作で米国支える英国

これはチャバースへの容赦のない攻撃を思い起こさせ、そこにはベネズエラの反政府勢力のために仕組まれた特有の悪意を見てとれる。2006年、英国の公共テレビ局「チャンネル4」のニュースはベネズエラがイランと共同して核兵器の開発を企てているとしてチャバース大統領(当時)を非難した。ワシントンから(ベネズエラに)派遣されていたジョナサン・ラグマン記者はチャバース政権の貧困撲滅政策をあざ笑い、チャバースを「腹黒い道化師」として描写した。その一方、戦争犯罪者のドナルド・ラムズフェルド米国防長官(当時)がチャバースをヒトラーになぞらえたのを問題にしようとはしなかった。

英BBCは何の違ひもない報道を行っている。英国のイングランド西部にある某大学の研究グループがベネズエラに関するBBC放送の過去10年間の報道に組織的な歪曲がなされているのを追究した。304本のBBCの報道番組を検証した結果、ベネズエラ政府の政策をある程度肯定的に報じているのはこのうち3本だけだったことが判明した。BBCにとって、ベネズエラの民主的で先進的な政策、人権を擁護する諸々の立法、食糧保障プログラム、医療保険に関する進歩的な政策、貧困削減プログラムは無きに等しいのである。人類の歴史における最も偉大な識字プログラムである「ミッション・ロビンソン」はほとんど肯定的に報道されなかつた。

事実を無視することによる敵意に満ちた検閲に加え、ベネズエラ政府が麻薬密売者集団であると非難したような露骨な捏造報道が行われている。どれ1つとして目新しいものはない。ここ数年、キューバが誤って報道され、攻撃された手口に目を向けるべきだ。「国境なき記者団」が報道の自由度について世界の国別ランキングを発表したばかりだ。米国は49位にランクされ、マルタ、ニジエール、ブルキナファソやエルサルバドルより低い順位にある。

■9・11前からワシントンに巣くう狂気の集団

A: 国際情勢を見て、なぜ今がクーデターを推し進める絶好の機会となっているだろうか?(世界中に)広まる可能性のある事例としてベネズエラが存在することが最も重要な課題であるとすれば、例えば、欧州で米国の対応に加わり、これを受け入れる人々は出現するだろうか?

P: 米政府がインサイド・ベルトウエイ(ワシントンの中枢部)に巣くう「狂人たち」と呼ばれる正真正銘の過激派集団に支配されているのを理解することが重要である。これは米同時多発テロ事件(9・11)が発生する前から既成事実となっていた。このうち幾人かは際立ったファシストである。米国の覇権力の行使は覆い隠しようのない彼らの賭けなのである。ウクライナでの政変が示しているように、彼らはロシアとの核戦争のリスクを冒かず備えをしている。

この連中はすべてのまともな人間の共通の敵でとみなされるべきだ。例えば、ボリビアやエクアドルでやったように、彼らは

ベネズエラでクーデターを実施したいと思っている。政変によって世界で最も影響力のある社会改革の幾つかを後退させることができるからだ。彼らはかつてホンジュラスで一般市民の希望を打ち碎いた。

■石油価格引き下げなど夥しい破壊工作

米国とサウジアラビアが現在、石油価格を引き下げようと2国間で共同謀議しているが、これはベネズエラ、そしてロシアでさらに大掛かりで悲劇的な事態が引き起こされることを意味する。

A: ポリバル主義者にとって、米国とベネズエラ国内のエリート層の共同謀議を撃退するための最善のアプローチは何だろうか?

P: ベネズエラの大多数の人々とその政府は、自分たちの国が攻撃されていることについて世界に真実を伝える必要がある。世界各地で騒乱が起きている中、大勢の人が(ベネズエラの人々の声)を聞いている。騒乱の渦中にいる人々は不安定が永遠に続き、貧困が永遠に続き、戦争が永久に続き、少数の人たちによって永遠に支配されることを望んでいない。そして、誰が一番の敵であるかを識別することになる。「どの国が人類の最大の危険要因となっているか」と質問した国際世論調査の結果を見てみるべきだ。ほとんどの回答者が圧倒的に米国とそのおびただしい数のテロ行為と破壊工作を指摘している。

■米国の左派の責任は?

A: ベネズエラ国外の左翼の人々、特に米国の左派の人たちに直接の責任があるだろうか?

P: 「あなたが指摘する『左翼』とは誰をさすのか?」を聞く必要がある。それは見かけ倒しとなったオバマが(有力な大統領候補として)台頭したのに心酔し、(大統領就任後の)オバマが情報の自由や反対意見を犯罪とみなすようになったため沈黙してしまった北米の数百万人ものリベラルな人々だろうか? それともニューヨークタイムズ、ワシントンポスト、英ガーディアン、英BBC放送が伝えるニュースや記事を信じる人たちなのだろうか?

これは重要な問い合わせである。「左翼」という言葉は、決して激しく論議され、悪い言葉としてはびこるものではなかった。私の見方では、ラテンアメリカで米国に支援された軍隊に対してひるむことなく戦っている人々は、共通の敵を見極めたまさにその時に、この言葉の本当の意味を理解したのだ。

彼らの主義主張とその勇気を少しでも共有できれば、我々は自國で直接に行動すべきである。まずはメディアの宣伝工作との闘いから始めることを提唱したい。それは私たちの責任であり、これまでそれが今日ほど喫緊の課題となったことはなかった。

【関連記事】

- ジョン・ピルジャー『米国はなぜ「悪」を必要とするか 新たなファシズムの台頭(1)』(「アジア記者クラブ通信」270号／2015年3月10日発行)尚、同号の特集は「ベネズエラでのクーデター未遂事件とメディア」。
- ジョン・ピルジャー『同(2)』(「アジア記者クラブ通信」271号／2015年4月10日発行)

翻訳: 加治康男(独立ジャーナリスト)

原文: 2015年2月17日付johnpilger.com

The struggle of Venezuela against 'a common enemy'
<http://johnpilger.com/articles/the-struggle-of-venezuela-a-against-a-common-enemy>